

牛舎内作業の省力化

酪農は他畜種と比較して労働時間が長い。農林水産省の統計データでも示されている(図1)。今回取材した酪農家は、両親から経営を引き継ぎ、2011年に繋ぎ牛舎を新築。搾乳牛約30頭から60頭へ規模拡大すると同時に、同じ繋ぎ牛舎でも将来を見据えた省力化のための牛舎を建設した。

牛舎内上部にはいくつものレールが目に入る(写真1)。レールは2種類あるが、このうち1種類は「キャリアレール」と呼ばれる搾乳ユニットを運ぶレールである。搾乳は朝夕の1日2回。毎日やらねばならない作業だ。搾乳ユニットはミルクカーやチューブなど複数のパーツで構成されており、それなりの重量がある。一般的にはこの搾乳ユニットを担いで牛の横まで運び搾乳、終わればまた次の牛のところまで担

図1. 自営農業労働時間



出典：平成25年度 個別経営の営農類型別経営統計



写真4. ロールペール(上)、自給飼料のコーンサイレージ(下)



写真3. 自動給餌機とレール(左、上)



将来を見据えた省力化 少人数での牛舎管理

酪農と稲作の両方に軸足をおく兼業農家。酪農は約60頭規模を飼育する。限られた労働力で、酪農と稲作の両方の作業効率を高め、徹底的な省力化に努めた工夫を紹介する。

<農場データ> 所在地：関東地方 飼養頭数：経産牛54頭 従業員数：3名

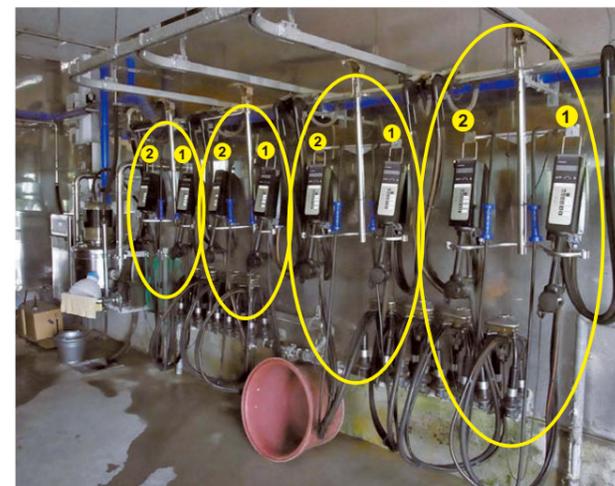


写真2. 左右対になった搾乳ユニット



写真1. 牛舎内に張り巡らせた搾乳ユニット搬送レール

作業の外部化による省力化

飼料費や初妊牛相場の高騰など、酪農を巡る情勢は厳しさを増している。そんな中、同農場では、自給飼料の活用と自家後継牛の育成により、そうした情勢からの影響を受けにくい経営を成り立たせている。

例年、自給飼料はトウモロコシと麦類のロールペールサイレージ(写真4)を作っているが、一部の作業はコントラクターに依頼している。その理由として、外部労力の活用による省力化だけでなく、専用の高価な機械を所有しなくても良いというメリットがある。今年初めてホルクロップサイレージ(稲WCS)を購入し給餌している。15年9月の関東・東北豪雨により、刈り取ったばかりのコーンサイレージが浸水被害に見舞われたためだ。稲WCSは初の試みだったが、牛の調子も良いので今年度は稲WCSの作付けにも挑戦したいと意気込む。コントラクターを活用した作業の外部化により、自給飼料の利用拡大も期待できる。

同農場では、後継牛は基本的には自家育成としており、初妊牛の導入はほとんどない。育成牛は3カ月齢より分娩2カ月前まで岩手県の預託施設で飼育管理をしている。約20カ月間、育成牛の管理を外部化することで一定の預託料はかかるものの、相場には左右されずに育成牛を確保できるほか、かつ作業の省力化にもつながっている。

牛舎に省力化の工夫を徹底して取り入れ、搾乳とほ乳、乾乳牛管理など一部の作業は両親も手伝っているが実質的な酪農作業は1人で行っている。「一番つらいのは搾乳作業ですが、レールがあるから父母も手伝える」という。

もう1つのレールは自動給餌機用である(写真3)。一定の時間になると設定した量の飼料を自動で給餌する。通常、繋ぎ牛舎では1頭1頭給餌するために、酪農家が自ら牛舎内を1周、数種類の飼料を給餌する場合は2〜3周しなくてはならないが、その作業が省力化できる。また、同農場ではTMR給餌用と、濃厚飼料用の2つの自動給餌機を導入しており、個体に合わせた栄養バランスなどを調整できるようにしている。

いでいかなければならず、かなりの重労働だ。しかし、このレールのおかげで搾乳ユニットを滑らせるように引つ張り運ぶことができる。更に、ミルクカーにもひと工夫している。自動離脱装置をつけたことにより、搾乳が終わると自動でミルクカーが離脱する。これにより、1頭1頭の終わるタイミングを気にすることがなくなり、牛舎内を歩く移動時間の削減につながっている。また搾乳ユニットは左右に1基ずつ対になったものを採用しており、同時に2頭を搾乳できる(写真2)。1回の搾乳作業は準備や片づけも含め1時間30分ほど終わるといふ。自動離脱装置をつけてから、乳房炎もほとんど発生せず搾乳作業がとても楽になったという。